

令和 2 年 5 月 18 日現在

機関番号：34310

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K17095

研究課題名（和文）ロバート・トレンズの貿易および植民に関する経済政策思想についての総合的研究

研究課題名（英文）Robert Torrens' Theory of Economic Policy: International Trade and Colonization

研究代表者

久松 太郎 (Hisamatsu, Taro)

同志社大学・商学部・准教授

研究者番号：60550986

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では主に次のことが示された。第1に、トレンズの経済成長理論がリカードのものとして再構築されていた動学均衡成長を包摂していること、第2に、トレンズが国際貿易のリカード・モデルの創造に大きくかかわっており、彼の貿易論がリカード本人の貿易理論の再考に影響を与えた可能性があったことである。また共同研究では、トレンズおよび彼の論敵との貿易政策論争の概要が示され、加えて彼の不均衡生産による一般的停滞論の理論的説明が与えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の当初の目的は、1830～40年代における経済政策に重要な提言をなしたロバート・トレンズの貿易と植民に関する理論と政策を分析することであった。最終的には、この枠組みを超えてトレンズの貿易、経済成長、方法論等の多面的な研究が遂行された。彼の経済成長理論に関する研究は経済学史の分野で国際的に著名な学術誌に掲載され、貿易理論に関する研究は国際コンファレンスで発表された。また貿易政策に関する研究およびそこから派生した研究成果は、国際共同研究として国際コンファレンスで発表された。

研究成果の概要（英文）：This study showed that Torrens' theory of economic growth was characterized by the Ricardian model of dynamic equilibrium growth, and that he was one of the creators of the Ricardian model of international trade and his discussions on trade might be involved in reconsidering Ricardo's original theory of trade. The debate over trade policy between Torrens and his antagonists was outlined in the first joint research. In the other joint research on general stagnation, we pointed out the originality of Torrens' theoretical contribution to the general glut controversy.

研究分野：経済学史

キーワード：トレンズ リカード 貿易政策思想

## 1. 研究開始当初の背景

- (1) 19世紀の古典派経済学がリカード、マルサス、ジョン・ステュアート・ミルによって牽引されたことは否定され得ない。しかし前二者の死後からミルの『経済学原理』公刊までの間には、十数年の空白が存在する。この空白の期間を含む1830～40年代には、工場法の制定・改正、救貧法の改正、植民運動、ピール銀行条例、穀物法の廃止など、イギリスの社会と経済を大きく左右する政策的改革が生じた。こうした激変の時代に、優れた分析能力でイギリス経済学界の理論的橋渡しをなし、上述のいずれの政策にも関わってきた人物がロバート・トレنزであった。トレنزは、近年の経済学史研究において国内外で最も再評価されつつある19世紀古典派経済者のひとりである。研究開始当初はリカードの『経済学および課税の原理』出版200周年を控えていたこともあり、その同時代の重要人物のひとりとしてトレنزがたびたび研究対象になっていた。
- (2) 研究開始前のトレنز研究では彼の貿易論の再考に注目が集まっていたが、1830年以後に関する再検討は満足のものではなかった。とりわけ理論分析の不十分さのために、理論にもとづいて提案された政策思想も十分に理解されているとはいえない状況にあった。またトレنزが互惠主義・関税同盟への視点を強調しないし言及するようになったことを考慮すれば、(宗主国と植民地との貿易をも視野に入れた)彼の植民論との関わりも無視し得なくなる。しかし、従来の貿易政策論研究では、植民論の研究を考察の外に置いた分析に終わっている。このように、1830年代以降の彼の貿易論と組織的植民論を相互に関係づけ、理論・政策両面の数学的分析と、貴重文献の歴史的分析とを織り交ぜながら総合的に遂行する研究が当初望まれていた。
- (3) 一方、なぜ貿易や植民が政策として要求されていたのかを考察するためには、閉鎖経済での経済成長の動態を検討する必要がある。また古典派経済学者の多くが意見を寄せた貿易の問題についていえば、トレنزの国際貿易理論史における立ち位置を明確にしておく必要もある。さらに古典派貿易論とセー法則との関連は指摘されてきたが、このセー法則についてのトレنزの見解も再検討が求められている。これら3つの検討課題については、研究代表者は、本研究の着想のもとになった「リカードウ経済学の普及と受容に関連したトレنزの理論的研究」(若手研究(B)25780144;平成25～27年度)においてある程度の成果をあげていた。しかしながら、その成果の公表は国内にとどまっていたし、その後の研究過程で、それらにいくつかの修正すべき論点や追加されるべき論点があることが判明した。

## 2. 研究の目的

- (1) 本研究の第1の目的は、1830～40年代における経済政策に重要な提言をなしたトレنزが19世紀イギリスの展開においていかなる貢献を果たしたのかを、貿易と植民に関連する理論と政策の両面からの分析を通じて解明することである。
- (2) 以上との関連で、閉鎖経済での経済成長の動態についてトレنزはいかなる理論をもっていたのか、彼の国際貿易理論史での貢献は何だったのか、セー法則について彼はどのような見解を抱いていたのかを理論的に解明することが第2の目的である。
- (3) いずれの研究も国際的に発信されることを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究は、その着想のもとになった「リカードウ経済学の普及と受容に関連したトレنزの理論的研究」(若手研究(B)25780144;平成25～27年度)を発展させたものと、そこから派生して新たに研究されたものとに大別される。前者は以下の(1)～(3)、後者は(4)である。さらに(4)から派生したものとして(5)がある。なお、(6)は研究したものの一定の成果が得られなかったものである。

(1) 第1はトレنزとリカード的動学均衡成長モデルとの関連についての研究である。この研究は、若手研究(B)25780144の一環として『マルサス学会年報』第24号(2015年)に掲載された論文「ロバート・トレنزとマルサス人口論 1817年論文と1829年補論における理論と政策」の成長理論の部分発展させることによって遂行された。

この研究は単なる従来の部分的発展形というものではなく、新たな議論や図の追加、モデルのシンプル化、参考文献の付加などによって大幅な修正がなされ、さらに英文化によって国際的に発信された。

(2) 第2は国際貿易のリカード・モデルとリカード自身の貿易論との関連についての共同研究である。本研究には、若手研究(B)25780144の一環として『国民経済雑誌』第214巻4号(2016年10月)に掲載された「デイヴィッド・リカードと「比較優位の原理」 その先駆者とその後の展開」および同誌第214巻第5号(2016年11月)に掲載された「ロバート・トレنزと比較優位の原理」で論じた議論の一部が利用されている。田淵太一教授(同志社大学)との共同研究によって、リカード本人が『経済学および課税の原理』においてリカード・モデルを展開して

いたのか、そうでなければリカード自身はどのような貿易理論を展開しようと試みたのかが再考された。この後半部分が本研究で新たに追加された。

(3) 第3はトレンズと国際貿易のリカード・モデルとの関連についての総合的研究である。これは、若手研究(B)25780144の一環として『国民経済雑誌』第214巻4号と第214巻第5号に掲載された先述の2つの論文(2)を参照)を基礎にして、新たな考察を加えつつ総合的に分析したものである。これは本研究の主題をなすトレンズ貿易政策論の理論面の基礎を与えるものである。若手研究(B)25780144とは、考察対象や分析過程、細部の緒論、結論が異なっている。

研究代表者の所属機関で国際コンファレンス“Kyoto Conference 2019 on James Mill and John Stuart Mill / Classical Political Economy”(リカード研究会主催)を開催した際には本研究の成果が発表され、その開催にかかわる経費の一部が間接的に使われた。

(4) 第4は1830年代以降のトレンズの貿易政策思想についての共同研究である。本研究は、Rogério Arthmar 教授(ブラジル Universidade Federal do Espírito Santo)と共同で遂行され、同教授によって“Colonel Torrens, Nassau Senior and the controversy over reciprocity and free trade”と題して第22回ヨーロッパ経済学史学会(2018年6月)で報告された。共同研究は、主にオンラインでの議論を通して行われた。暫定的な成果しか挙げられておらず、本科研事業終了後も研究を継続する予定である。

(5) 第5は、トレンズ、セー法則、理論的手法、古典派的標準体系についての共同研究である。研究代表者は、若手研究(B)25780144の一環として“Robert Torrens and the Say-Mill Law of Markets”と題して神戸大学大学院経済学研究科発行の *Discussion Paper* 第1524号(2015年)としてまとめておいたが、これに Hisamatsu (2009)と Arthmar (2014)の共通する議論を組み合わせて発展させた。本研究も(4)と同様に Rogério Arthmar 教授との国際共同研究で、主にオンラインでの議論と国際コンファレンス時の打合せを通して行われた。

また、ここで分析したトレンズの一般的停滞論は貨幣的作用による不均衡を包摂しているため、本研究代表者が分担者として加わっている別の古典派貨幣論に関する科研事業(基盤研究(C)16H03602)の成果も一部加わっている。

(6) 最後は、19世紀前半のイギリス議会における機械輸出問題に関する共同研究である。これは申請時に研究協力者として依頼していた関東学院大学山本勝造准教授と共同で、機械輸出によって貿易当事国間の貿易パターンが逆転する理論モデルを構築することを試みたものである。モデルは一旦完成したものの、後に設定段階における初歩的な欠陥が見つかり、現在も思考中である。残念ながら成果を出すまでにはいたっていないが、科研事業終了後も研究を継続する予定である。

#### 4. 研究成果

「3. 研究の方法」で述べた(1)~(5)に関して、それぞれ以下のような成果が得られた。

(1) トレンズとリカード的動学均衡成長モデルとの関連についての研究における結論は、次の通りである。

賃金理論を包摂するトレンズの動学的経済成長理論は、サミュエルソンやヒックス、ホランダール、カサロサらガリカード経済学の中から新古典派的な要素をくみ取ろうとした過程で作り出された「リカードイアン」成長理論と多くの点で類似している。トレンズの最大賃金と最小賃金の概念はそれぞれ、ヒックスとホランダールの共著論文で示された「屋根」と「床」の概念に相当し、またカサロサの論文で指摘された動学均衡経路の概念は、トレンズの立論の中により鮮明に見出される。この研究によってトレンズには古典派成長理論において一定の貢献が与えられることが示された。

以前の課題研究ですでに着手していたこの研究を発展するに至った契機と理由は、それが植民論・貿易論の基礎的な研究を与えることに加えて、非主流派経済学の有力学術誌 *Cambridge Journal of Economics* に掲載された Olivier Rosell の論文(Rosell 2017)による影響が大いに関連している。Rosell は1829年のトレンズ分配論を静学的モデルで合理的再構成したのに対し、本研究では(トレンズの主張と数値例とにしたがって)それが動学的なモデルで分析された。具体的には、分配論のうち賃金理論に焦点が当てられ、土地の質、労働の熟練度、貿易の自由度に左右される最大賃金(上限)と、風土と慣習により定まる最小賃金(下限)とで形成される空間を、賃金基金説によって決まる現実賃金が資本蓄積とともに変動する様子が、2本の動学式を含む連立方程式体系とそれによって描かれる位相図によって示された。

研究成果は“Robert Torrens and the Classical Theory of Growth”と題して神戸大学大学院経済学研究科発行の *Discussion Paper* 第1633号(2016年)として英文でまとめられた後、多くの修正と査読を経て、“Robert Torrens and the Ricardian Model of Dynamic Equilibrium Growth”と改題のうえで、ヨーロッパ経済学史学会発行の国際的に定評ある学術誌 *The European Journal of the History of Economic Thought* の第25巻第2号(2018年5月)に掲載された。

(2) 国際貿易のリカード・モデルとリカード自身の貿易論との関連についての共同研究では、リカード本人が『経済学および課税の原理』においてリカード・モデルを展開していたのか、そうでなければリカード自身はどのような貿易理論を展開しようとしたのかが再考された。本研究で新たに追加された後半部分では、リカード本人の志向する国際価値論は、国内交易の場合と同様に、生産費説にもとづいていることを理論的に再解釈した。この新しい論点は研究史における貢献である。

研究成果は、「リカードはリカード・モデルを提示したのか」と題して、日本国際経済学会発刊の学術誌『国際経済』第69巻(2018年10月)に掲載された(田淵太一氏との共著)。共著者の田淵太一氏は、リカード本人が考えていたであろう国際価値論の研究をさらに推し進め、独自に英文によってそれを発表している(Tabuchi 2018)。

(3) トレンズと国際貿易のリカード・モデルとの関連についての総合的研究における現時点での成果の概要は以下の通りである。

本研究は、リカード・モデルはいったい誰によって創造されたのか、なぜこのモデルはリカードによるものとして語り継がれることになったのかを明らかにした。ジェームズ・ミルがリカード・モデルの基本的源泉を1821年に与えた後、トレンズが1826年に(ジェームズ・ミルとジェームズ・ペニンントンの間接的な援助を受けつつ)交易条件の斬新ではあるが未熟な理論をともなった比較優位の例証を提起した。トレンズは貿易理論を展開するにあたって抽象的な理論を採用することを推奨したが、それが契機となってジョン・ステュアート・ミルがより洗練された、いわゆるリカード・モデルの形をした貿易理論を完成させるに至った。リカード・モデルは、リカードではなく、彼の同時代人たちによって形成されてきたわけだが、こうしてその形成にかかわってきた経済学者たちが貿易理論を展開する際にいつもリカードの名を口にしてきたことで、後の経済学者たちはそのモデルの創造者がリカードであると混乱してきたと考えられる。本研究はまた、貿易利益にかかわるリカード理論の先駆性についてのトレンズの要求が、スラッファにリカードの「4つの魔法の数字」の本当の意味を気づかせることに貢献した可能性を指摘した。

研究成果の発表については、まず『国民経済雑誌』第214巻4号と第214巻第5号に掲載された先述の2つの論文を1つにまとめ、“Constructing a Myth that Ricardo Was the Father of the Ricardian Model of International Trade: A Reconsideration of Torrens’ Principles of Comparative Advantage and Gain-from-trade”と題して神戸大学大学院経済学研究科発行の *Discussion Paper* 第1630号(2016年)で英文として発表された。その後、それが「ロバート・トレンズと比較優位の原理」と題して第35回リカード研究会(2017年7月)で報告され、次に新たな論点を加えられて経済学史学会第82回大会(2018年6月)で「リカード・モデルの創造」という題目で報告された。さらに“On the Ricardian Model of International Trade”として2019年9月と10月に国内外2つの国際コンファレンスで発表され、“The Ricardian Model of International Trade: Creation, Evolution, and Dissemination”と改題のうえ査読付き海外誌に投稿、改訂および再提出の要求がなされている。査読者からの指摘を考慮して上の結論の一部は修正される可能性がある。

(4) 1830年代以降のトレンズの貿易政策思想についての共同研究では、1830年代以降(特に1840年代)の貿易政策をめぐるトレンズとその論敵たちペロネット・トムソン、ハーマン・メリヴェイル、アンソニー・ローソン、とりわけナッソー・シーニアとの論争を概観したうえで、論争そのものをセー法則や正貨流出入メカニズムと結びつけて検討しようとした。特筆すべき結果は得られておらず、現在も遂行中である。しかし、次の点については述べておく必要がある。第1に、この研究を進展させるための貴重な資料(ボルトン・クロニクル誌掲載のトレンズの論説)を入手できたこと、第2に、この研究でセー法則に着目した関係で次の(5)で述べる新たな共同研究の道が開けたことである。現在は、(5)の方に重点をおいて研究しているが、本科研事業の終了後も継続して(4)の遂行を試みる予定である。

(5) トレンズ、セー法則、理論的手法、古典派的標準体系についての共同研究は、トレンズの理論的手法を軍事教育と関連づけることから出発して、彼の価格理論の特質(相対価格と均等利潤率の同時決定にかんするスラッファ理論との類似性)を明らかにし、代表作『富の生産にかんする試論』(1821年)で展開された不均衡生産の累積による一般的停滞論により明快な説明を与えた。とりわけ、貨幣的作用による不均衡を包摂している一般的停滞論は、古典派一般的供給過剰論史におけるトレンズの貢献を与えるものである。

研究成果は、“Torrens, the Quantitative Approach to Economic Theory and Say’s Law”と題して第23回ヨーロッパ経済学史学会(2019年)およびオーストラリア経済学史学会(2019年)で、共同研究者である Arthmar 教授によって発表された(代表者も発表に同席)。その後、“Robert Torrens, the quantitative method and the classical standard system”と改題のうえ、現在海外の学術誌に投稿中である。

#### 主な参考文献

Arthmar, R. (2014) “Torrens and Malthus’s challenge” *Journal of the History of Economic*

*Thought*, 16(1): 67–82.

Hisamatsu, T. (2009) “Robert Torrens' Theory of Profit Reconsidered” *History of Economics Review*, 49: 1–14.

Rosell, O. (2017) “Wages, competition and the surplus of labour: a classical contribution to explaining profit” *Cambridge journal of economics*, 41: 63–80.

Tabuchi, T. (2018) “Ricardo's Theory of Value and International Trade: On the Invalidity of the Alleged ‘Labour Theory of Value’” 『経済学史研究』 60(1): 79–99。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 田淵太一・久松太郎	4. 巻 69
2. 論文標題 リカードはリカード・モデルを提示したのか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国際経済	6. 最初と最後の頁 1~31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） <a href="https://doi.org/10.5652/kokusaikeizai.kk2018.01.t">https://doi.org/10.5652/kokusaikeizai.kk2018.01.t</a>	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hisamatsu Taro	4. 巻 25
2. 論文標題 Robert Torrens and the Ricardian model of dynamic equilibrium growth	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The European Journal of the History of Economic Thought	6. 最初と最後の頁 203~226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） <a href="https://doi.org/10.1080/09672567.2018.1425467">https://doi.org/10.1080/09672567.2018.1425467</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 久松太郎
2. 発表標題 リカード・モデルの創造
3. 学会等名 経済学史学会第82回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Rogerio Arthmar
2. 発表標題 Colonel Torrens, Nassau Senior and the controversy over commercial policy and free trade
3. 学会等名 The European Society for the History of Economic Thought: The 22nd Annual ESHET Conference, University of Madrid, 7-9 June 2018, "Entrepreneurship, knowledge and employment"（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田淵太一
2. 発表標題 リカードはリカード・モデルを提示したのか
3. 学会等名 日本国際経済学会第76回全国大会共通論題「比較優位論の現代的意義：『経済学および課税の原理』出版200年記念」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Rogerio Arthmar
2. 発表標題 Torrens, the Quantitative Approach to Economic Theory and Say's Law
3. 学会等名 The 23rd Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Taro Hisamatsu
2. 発表標題 On the Ricardian Model of International Trade
3. 学会等名 Kyoto Conference 2019 on James Mill and John Stuart Mill / Classical Political Economy
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Taro Hisamatsu
2. 発表標題 On the Ricardian Model of International Trade
3. 学会等名 The 2019 History of Economic Thought Society of Australia Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Rogerio Arthmar
2. 発表標題 Torrens, the Quantitative Approach to Economic Theory and Say's Law
3. 学会等名 The 2019 History of Economic Thought Society of Australia Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>神戸大学大学院経済学研究科・経済学部 研究活動 Discussion Paper  <a href="http://www.econ.kobe-u.ac.jp/activity/publication/dp/arc2016.html">http://www.econ.kobe-u.ac.jp/activity/publication/dp/arc2016.html</a></p> <p>「リカード・モデルの創造」『経済学史学会大会報告集 第82回全国大会』pp.26-30.</p> <p>「ロバート・トレンズと比較優位の原理」第35回リカードウ研究会  (2017年7月、立教大学)  <a href="https://www.ricardosociety.com/過去の研究会/">https://www.ricardosociety.com/過去の研究会/</a></p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	Arthmar Rogerio  (Arthmar Rogerio)		
研究協力者	山本 勝造  (Yamamoto Katsuzo)		